

平成21年 6月11日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18601005  
 研究課題名（和文） 教育大学の学生参加による地域連携型総合的な学習の構築  
 研究課題名（英文） Construction of a Student Participating Integrated Learning that is Performed by the Cooperation with Local Organizations.  
 研究代表者  
 関 隆晴（SEKI TAKAHARU）  
 大阪教育大学・教職教育研究開発センター・教授  
 研究者番号：50171327

研究成果の概要：主として小学生を対象に、大阪府中部農と緑の総合事務所、柏原市市民生活部産業振興課、JA 大阪中河内、柏原市教育委員会、地元農家等との連携の下、大阪教育大学理科教育講座及び小学校教員養成課程総合認識系の学生が、地域連携型総合的な学習の時間における森林体験学習と食農教育に参加した。また、これらの活動に参加した卒業生を対象にアンケート調査を行い、これらの活動がこれからの時代に求められる、教員として必要な総合的で体験的な学習の指導力形成につながることを示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,600,000	420,000	3,020,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：「総合的な学習」のカリキュラム開発

キーワード：総合的な学習、体験活動、森林環境学習、食農教育、学生参加、地域連携

## 1. 研究開始当初の背景

子どもたちが地域社会の中で様々な生活体験や社会体験、自然体験を積み重ねることのできる総合的な学習の時間のプログラムを構築することは、子ども達の「生きる力」を育むための重要な課題である。そのためには地域社会の大人たちや地域行政が協力して取り組むことが大切であるが、教育大学においては総合的な学習を実践できる教員を養成することも不可欠な課題である。

## 2. 研究の目的

本研究においては、地域と連携した総合的な学習のプログラム開発に教育大学の学生

が参加することにより、新たな時代の教員に求められる資質を身につけた学生の養成を行いつつ、地域連携型の総合的な学習のプログラム構築を目指す。そのため、本研究においては以下の二つの目的を設定する。

(1) 教育大学の学生が参加した地域連携型総合的な学習として、森林体験学習と食農教育に関するプログラムを、地域行政及び地域住民と協力して実施する。

(2) 上記プログラムに参加して現職教員となっている卒業生を対象にアンケート調査を行い、これらの活動が現代的課題に対応できる教員の資質養成にどのように寄与しているか調べる。

### 3. 研究の方法

(1) 地域連携型総合的な学習への学生参加

#### ①森林体験学習

柏原市立小学校の総合的な学習の時間における、季節の森林観察、落ち葉のお風呂、土壌観察、間伐体験、植樹等のプログラムに、大阪教育大学理科教育講座の学生がボランティアリーダーとして参加した。フィールドは標高277mの高尾山創造の森と堅上小学校近隣の里山である。

#### ②食農教育

②-1、田んぼをフィールドとする取組においては、柏原市立小学校の総合的な学習の時間における農業体験活動に、小学校教員養成課程総合認識系の学生がボランティア参加した。

②-2、畑をフィールドとする取組においては、総合認識系の学生が本学教材園を用いた作物の栽培活動（特に大阪の地場野菜とさつまいも）とそれを通した幼稚園児と小学生との交流学习を行った。栽培活動については、1回生と2回生を対象とする3つの授業と関連させて実施している。1回生では、総合認識系の必修教職科目である「教職入門セミナー」（前期）であるが、ここでは、学外講師の体験を交え「土笛づくり」の教材開発に寄せる情熱と喜びについて、体験的に学ぶ機会を提供している。2回生の「総合演習」（前期）では、栽培活動を通して、子どもの農活動指導や活動準備に必要な事項の学習を行っている。学生にとって、他者への配慮と育ちに対する苦勞と喜びを実感する基本的な教育的資質をのぼす機会となっている。「創造と表現」（後期）では、秋から冬にかけての農作業と共に、幼稚園で土への親しみを持たせるための演劇を実施している。

(2) 卒業生に対するアンケート調査

#### ①森林体験学習

2002年から始まった森林体験学習に複数回ボランティアリーダーとして参加したことのある、2003年度～2008年度の理科教育講座の卒業生18名を対象に、学生の教師としての資質向上に与える森林体験学習の効果に関するアンケート調査を行い、その結果を解析した。回収率は83%（15名）であり、回答者の73%が現在小学校の教員、その他中学校教員、高等学校教員、養護学校教員等教職あるいは教職関連の職についていた。

#### ②食農教育

総合認識系卒業生の教員となっている者を選び、栽培体験と教師の専門性について調べるために郵送調査を行った。回収率は61%で、男性教諭2名、女性教諭15名の計17名であった。対象者すべてに栽培体験があった。

調査対象者は、栽培体験をした時期は様々であるものの、大学生の頃と答えていた者が最も多かった。これは、調査対象者の中に大学時代、栽培体験を行うことが必須である学科に所属していた者が多かったためであると考えられる。また、教師になってからの栽培体験を挙げていた者もあったが、1名以外はそれ以前に栽培体験を行ったことも記入していたことから、ほぼ全員が教師になるまでに栽培体験を行っていたといえる。

### 4. 研究成果

(1) 学生参加による地域連携型総合的な学習の実施

#### ①森林体験学習

森林体験学習は、柏原市内の小学校を対象に、大阪府中部農と緑の総合事務所、柏原市市民生活部産業振興課、柏原市教育委員会、実施小学校、大学からなる緑の里山いきいきプロジェクトチームによる協議の下、2002年より実施している体験学習である。高尾山の周辺には小学校が数校隣接するという立地条件に恵まれ、このフィールドでは体験学習を授業時間内に容易に行うことができる。この活動には、大阪教育大学学生がボランティアリーダーとして参加し、児童に対する教育だけではなく、参加する学生達にも、(1)実践的指導能力の取得、(2)児童達とのコミュニケーション能力の向上、(3)子ども理解力とコーディネート力の練磨の3点を目標とし、将来の教員としての資質を高めることも、この森林学習における目標であった。

2006年度～2008年度における森林体験学習の参加校、参加児童数、参加ボランティア学生数を下表に示す。

表 2006年度～2008年度の柏原市森林体験学習の実施状況

実施年度	実施回数	参加小学校数	参加児童数	参加ボランティア大学生数
2006	9	4	620	55
2007	8	4	551	51
2008	11	5	807	77

参加校は毎年4校以上であり、ボランティア学生も延べ50名以上が参加した。学生は森林体験学習の中で、通常ボランティアリーダーとして補助者としての役割を果たしている。参加した学生達は、この活動の終了後に毎回反省会を持ち、各活動の問題点、改善点について意見を述べ合い、よりよい発展をめざす議論をおこなっている。

さらに、2006年度からは、学生自身が事前事後を通じ一貫して自分たちが主体となって遂行する場を設置し、学生自身がプログラムを発案し、実施要領を作り上げ、実施するという、参加学生の教師としての実践力を高める機会を設けてきた。

## ②食農教育

②-1、田んぼをフィールドとする取組は2004年に始まり、地域農家と小学生の学習をつなぐ栽培体験学習の実施とサポートを行っている。大阪府中部農と緑の総合事務所、柏原市市民生活部産業振興課、JA大阪中河内、柏原市教育委員会、実施小学校、大学（教員・学生）からなる食農教育推進協議会の下、2006年度2校、2007年度3校、2008年度4校と実施校は増加した。総合認識系の学生が田植え、稲刈り、収穫祭等の体験学習支援を行うと同時に、食農に関する授業や田んぼ新聞の作成により、学生の児童に対する理解を深め、自然理解力及び人間関係力、特に地域との連携力を高め、これからの教員として必要な総合的で体験的な学習の指導力形成につなげている。

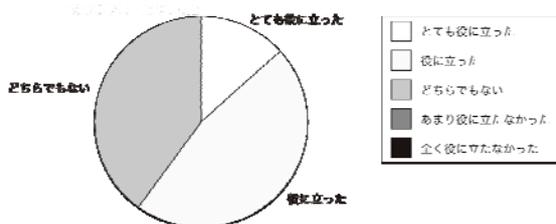
②-2、畑をフィールドとする取組は、2002年から実施された「総合的な学習の時間」に関わる実践的な指導力を育成することを目的として、栽培に関する児童の体験的活動を企画・準備し、実施する経験の場となるフレンドシップ事業として実施してきた。これらの活動によって、地域の子どもに栽培活動やものづくりを含む体験的な食農教育への参加機会を提供するとともに、学生の児童に対する理解を深めることはもとより、自然理解力及び人間関係力、特に地域との連携力を高め、児童や園児との交流のために土笛づくりや自然を生かしたものづくり、演劇などにも発展させ、これからの教員として必要な総合的で体験的な学習の指導力形成につなげている。

### (2) 卒業生に対するアンケート調査結果

#### ①森林体験学習

森林体験学習での経験が、学生の教師としての資質向上にどのような効果があるのかという点について調査を行った。

まず、森林体験学習が現在の教職についているうえで役だったかどうかの質問については「とても役に立った」「役に立った」と回答したものが60%を占め、「あまり役に立たなかった」「全く役に立たなかった」と回答したものは0%であった。これからは、森林体験学習に参加することは、教職につくうえで有益であることが示された。



質問「森林体験学習は現在の職業に役立っているのか」への回答

具体的に、どのような点が現在の教職に役だったのか、複数回答可ということで7項目からの選択質問を行った結果、回答数がもっとも多かったのは「児童とのコミュニケーション力を養えた点」であり、ついで「教科の知識（理科）（それ以外）」、「コーディネート力」「教材開発力」が続き、「プレゼンテーション力」を示したのは1名であった。

7項目以外にどのような点が教員としての資質向上に役だったかという問いについての自由記述を以下に紹介する。

体験学習自体が、自分自身の野外での自然理解、自然体験の学びにつながったという以下のような記述が見られた。

「里山の中で実際にどのように伐採しているのか等、初めて知ったことがあり大変興味深かった。」

「身近な自然について、少しは分かるようになった。身近な植物をもっと知りたいと思えるようになった。」

「日本の人工林の様子や林業に携わる人々の努力や仕事を実体験を通して学ぶことができた。」

さらに野外活動を実施していくコーディネート力、子供理解向上として以下の記述をした者もいた。

「引率の方法や課題など、参加したことで多くのことを学ぶことができた。」

「子ども達の表情から体調や気分を読み取ったり、行動を見て興味関心をもつことに気づくなど（子どもに対して）の観察力を養うことができた。」

また、県によっては環境学習が導入されており、その授業を進める上で役立っているとの記述や、実施プログラムの充実を求める意見もあった。さらに、「環境を学んでいく上ではヒトとの関連、環境との関連が重要であるにもかかわらず、立地条件によってはこのようなフィールドをもつことのできない学校もあり、そのような場合でも何らかの形で地域の力を活用した体験学習を促進していかなければならない。」といった意見もあった。

これらのアンケート結果からは、森林体験学習が学生の教員としての資質向上に役立っており、現場での実践力のスキルアップに有益であることが示された。

#### ②食農教育

本研究では、特に畑を使った栽培活動への取り組みを教育の基礎的な学習内容としてどのように評価しているか、栽培活動と教職専門性について調査を行った。

栽培体験のペースは、週に1、2回が多かったが、これは栽培体験を週1回の授業の中で行っていることが関係していると思われる。家の手伝いとして栽培体験をした者には、

農繁期、田植え・稲刈り・脱穀時との回答が見られた。

栽培体験をした期間は、半数以上が1年間はやっていたことがわかった。ほぼ全員が半年以上やっていたこともわかった。これも授業において栽培体験で継続して行っていたことが関係していると思われる。

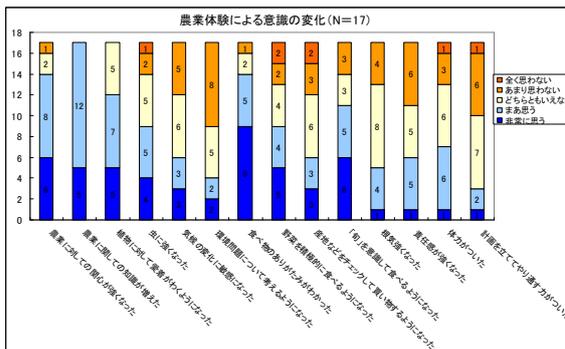
栽培体験をした場所では、学校が最も多く、それ以外では自分や親戚の田畑や、自宅のベランダ・庭といった回答も挙がっていた。

栽培体験を共に行っていた者では、友人が最も多く、その次に教師が多かった。

栽培体験を行っていた当時の感想については、面倒くさい、宿題といった義務感から消極的に取り組んでいた者も含め、ほとんどが肯定的な感想を並べて記入していた。植物の成長を観察できたこと、対象植物を用いた料理や加工品作り、仲間との作業の3つが肯定的な感想を持った理由であるとまとめることができる。全くの否定的な感想を書いていた者は2名いたが、両者とも家の手伝いとして栽培体験を行っていた者であり、学校で行った栽培体験に対しては、肯定的に捉えられていることがわかった。

栽培体験が今のあなたにとって有意義だったかという質問では、1名を除いて全員が有意義であったと回答している。教師になった現在に役に立っているからという理由はもちろん、経験したという事実そのものを有意義だった理由と答えている者も少なくなかった。

農業の体験を行うことによってどのような意識や考え方に変化があったかについて、いくつかの項目を質問した結果は以下の表の通りであった。



農業に対する関心が強くなったかどうかの問いに対して、80%以上が「非常に思う」「まあ思う」と答えた。実際に手や身体を動かす作業をすることが、関心を持つために有効であったのだろう。

農業に対する知識が増えたかどうかでは、全員が「非常に思う」「まあ思う」と答えた。実際に農作業をする中で、農作業の手順を知ったり、植物観察の中で、植物自体の構造、実のでき方を学んだことが理由として

考えられる。

植物に対して愛着がわくようになったかどうかでは、70%が「非常に思う」「まあ思う」と答えた。自分で育てるという経験が、植物に愛着を持たせることができたと考えられる。

虫に強くなったに関しては、半数が「非常に思う」「まあ思う」と答えていたが、どちらともいえないとの回答も多かった。気候の変化に敏感になったかどうかでは、「思う」と答えたのは35%程度であった。また、環境問題について考えるようになったかどうかでは、半数近くが「あまり思わない」と回答していた。栽培体験は環境教育とあまり関連性がないと考えられる。

食べ物のありがたみがわかったかどうかに関しては、半数以上が「非常に思う」と答えており、「まあ思う」もあわせると80%以上が肯定的な反応を示していた。これは、自分で食べ物(植物)を育てる中で農業の大変さを知ることが理由ではないかと考える。

野菜を積極的に食べるようになったかとの質問では、半数が「思う」と答えていた。自分で野菜を作ったという経験が食べようという気持ちを生んだのではないだろうか。

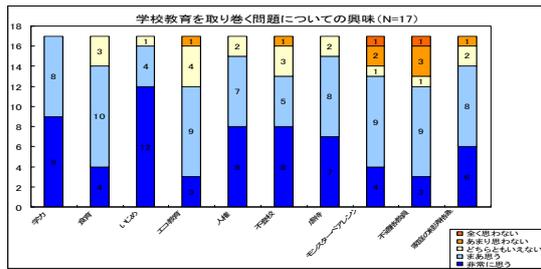
産地などをチェックして買うようになったに関しては、「思う」「思わない」とも同じような割合を示した。

旬を意識して食べるようになったかどうかでは、65%が思うと答えた。自分で育てる中で、いつ植えて、いつ実ができるのか、ということ学ぶ中で旬に関しても興味を持つようになることが理由であると考える。

根気強くなったに関しては、半数近くが「どちらともいえない」と答え、「思う」「思わない」は同数だった。責任感が強くなったに関しては、「あまり思わない」と答えた者が35%であった。「思う」の割合も同様であった。体力がついたでは、「思う」が40%「思わない」が23%であった。計画を立てて遣り通す力がついたでは、「どちらともいえない」が半数近くで、「あまり思わない」が次に多かった。「思う」と答えた割合は20%にも満たなかった。

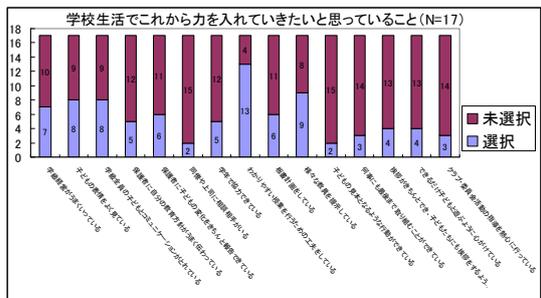
栽培体験を通して変化させることのできる意識は、植物そのものに対する意識や食に関する意識が多く、それ以外の項目ではそれほど意識が変化するようなことはないといえる。

調査対象者に、学校を取り巻く問題である「学力、食育、いじめ、エコ教育、人権、不登校、虐待、モンスターペアレンツ、不適格教員、家庭の経済格差」各項目に関する興味の程度をたずねたところ、すべての項目において7割以上が「興味あり」と答えていたが、中でも「いじめ、学力、人権、不登校」の項目で「非常に興味がある」割合が高かった。



「食育」と「エコ教育」に対する興味は、学校教育を取り巻く問題の中では低い順位であった。これは、子ども本人に関わる問題が学校教育において中心的な課題となっている現状の反映ではないかと考えられる。

学校生活でこれから力を入れていきたいと思っている項目を選択してもらった結果、わかりやすい授業を行うための工夫をすることが最も多く、様々な教具を提示するが次に多かった。これは、栽培体験を持っていることとどのように関連するのか、今後の課題である。



栽培活動の意義についての自由記述を以下に紹介する。

「土いじりや土の中にいる虫に対しての免疫ができたし、学校現場で子どもたちと栽培体験をするときに、だいたいの流れが分かるという点で有意義だった。」

「有意義だった。生きていく上で、野菜の育て方を知っていれば、得だから。小学校で身につけた技術がつかえるから。友だちとオープンに話をするのができ、友だちとの仲が深まったから（性格が良くなった。人に自分のことを打ち明けやすくなった。）体力がついたから。」

「有意義です。小学校の栽培活動に直接結びつくというほど、私の小学校では活動がさかんではありません。でも教師として、人間として、畑で得てきたことは役立っていると思います。」

「土に触れる心地よさ、収穫の喜びを実感できたことが有意義でした（家庭のプランターでの栽培）」

「今まで知らなかった植物の育ち方が分かって面白かった。また、育てるのには根気があることも痛感した。それらが体験できて有意義だったと思う。」

「有意義だった。植物のもつ偉大な生命力に感動したから。」

「大学時代の経験は、自分の中でも大きな糧となっている。作業の手順もだが、仲間とのつながりが大きい。」

「有意義であった。育てる喜びや収穫する喜びを味わうことができた。」

「そんなに有意義ではなかった。」

「自分自身の経験としては非常に有意義であったと言える。何事も「していない」よりも「している」方が自分自身に幅が出てくると思うので、有意義だったと言える。しかし、教員となってその経験が子どもたちに返っているのかと考えたときに疑問が残る。」

「有意義である。教師として、社会、家庭、生活などの授業で経験をもとに子どもたちに話をしてあげたり、実際に作業する際もアドバイスしてあげたりできるから。」

「有意義だった。草抜き、土をたがやすことなど、今教員となって、このような活動をするときまったく苦と思わない。命を育てたという実感があり、またそれを子どもたちと共有できるから。」

「お米を1年通して作って、苦労した割には少ししか取れず大変なことだと思いました。夏休みの水やりなども気になりましたし。新しい知識を目の前にし、おもしろさや楽しさがあり、それを感じていたという経験が今でも特別な思い出として出てくる時がある。」

「はい。特に、地元の農家さんたちとふれ合えたことが。私のまわりにはいませんので、日々の生活や悩み、また人生観そのものなど・・・大変勉強になり、かけがえのないきずなも結べたと思います。」

「少しずつ内容（もの）は変わっても、現在の教育活動で同じことを（今度は教える立場で）しているのでとても有意義でした。」

「今、教師として自分の体験を子どもたちに伝えたり、自ら実践することができるので、とても貴重なものだったと思います。」

これらのアンケート結果より、現在の学校教育において子どもたちの生活に関連した問題が大きな課題となっている中であって、栽培体験が食農教育を実施する上で大いに有意義であることが示されたと言える。

### (3) 成果のまとめ

現在の学校教育を取りまく問題として、「いじめ、学力、人権、不登校」といった問題が現職教員の興味を中心になっていることが示された。これらはいずれも現代社会における人間関係に由来した問題であると言える。

本来、学校教育は来るべきより良き社会の構成員となる大人を育成するシステムとして機能するはずのものである。その学校現場において、子どもを通して現われた現代社会

の矛盾に対処することが、現職教員の最大の関心事になっていることは、大きな問題である。

2002年に導入された総合的な学習の時間は、これからの激しい変化の時代を生き抜く力を持った子どもたちを育てるため、自ら考え、自ら課題解決に立ち向かうことのできる子どもの育成を目指して始まった。そしてそのような教育のできる教員には、教員の職務から必然的に求められる資質能力に加え、地球的視野に立って行動するための資質能力と、変化の時代を生きる社会人としての資質能力が求められている(1997年度教育職員養成審議会第1次答申)。

この課題に対応するため、我々は地域連携型の総合的な学習の場を構築し、その教育現場に教育大学の学生を参加させることによって、新たな時代に求められる教員として必要な総合的で体験的な学習の指導力形成を目指している。

本研究においては、まず柏原市立小学校を主たる対象とし、地域連携型の総合的な学習として森林体験学習と食農教育の構築を目指した。

いずれも大阪府農と緑の総合事務所、柏原市市民生活部産業振興課、柏原市教育委員会、大阪教育大学と実施校、更にはJA大阪中河内、地元農家等との連携協力の下に進められる事業であり、その継続的实施のためには大きなエネルギーを必要とする。それは、各組織、団体が各々の明確な目標を持ちつつ、共通の目的に向かって進むという連携の在り方を構築することである。この3年間の取り組みにおいて、いずれの事業もそれまでの活動を少しずつ、継続的に拡大発展させてきたことは上に示した通りである。

これらの取り組みに参加して現職教員となっている卒業生を対象に行ったアンケート調査は、標本数と対照不足のため予備調査ではあるが、いずれも現職教員としての活動において有意義であったことが示された。

現在、授業の一環として学生が参加しているのは畑をフィールドとした取組における栽培活動とイベントのみであり、他の活動への学生参加は、授業時間との兼ね合いが大きな支障となり、参加可能な学生によるボランティア参加となっている。

今回の予備調査で示されたように、総合的で体験的な学習の指導力形成に有効な地域連携型の総合的な学習に、学生が参加できるシステムを構築することが今後の大きな課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 岡崎純子・萩田耕司・野田俊弘・三島宏・松田幸子・中辻清泰・関隆晴  
大学と地域の連携活動による森林環境教育での教員養成系大学学生の教師としての成長の場の構築  
大阪教育大学紀要 第V部門 教科教育、57巻、85-91(2008) 査読無
- ② 坂本知恵・岡崎純子、高尾山(大阪府柏原市)の植物を活用した教材開発-地域と連携した森林体験学習の場の自然を活用した教材化の試み  
大阪教育大学紀要、第V部門 教科教育、56巻、17-26(2007) 査読無
- ③ 関隆晴・三島宏・生田享介・石川聡子・岡崎純子・野田文子・森実「持続可能な開発のための教育の10年」を視野に入れた森林体験学習による環境教育について 大阪教育大学紀要 第V部門教科教育、55巻、第1号、137-146(2006) 査読無

〔その他〕

ホームページ：大阪教育大学リポジトリ  
<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

関隆晴(SEKI TAKAHARU)  
大阪教育大学・教職教育研究開発センター・教授  
研究者番号：50171327

### (2) 研究分担者

岡崎純子(OKAZAKI JUNKO)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20195332  
野田文子(NODA FUMIKO)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：90189407